

3 「環境の日」から始めよう

平成18年6月3日～4日

1 ねらいとその達成状況

事業項目・区分 (現代的課題等)	青少年に地球環境を保全する意識を育む体験型環境学習事業 環境教育指導者・関係者の研修事業		
事業のねらい (学習要求や必要課題等)	環境や自然のしくみが楽しみながら分かるプログラム体験や「地球にやさしい」暮らし方を知ることとおして、漠然とした認識が日常生活や活動現場での実践につながるよう支援する。		
ねらいの達成状況 (参加者の変容等)	体験型プログラムをおして、参加者は改めて「環境」を意識し、実践に結びつける大切さを実感していた。講師は、体と心と環境にやさしい「食」「衣」「住」の取り組みを無理なく実践しながら暮らしている。その生活の基盤となる考え方に触れたり、その技術と一緒に経験したりして、日常に持ち帰ることが可能な成果を数多く得ていた。		
参加者のアンケート 結果(満足度)	事業全体 運営	100% 96%	プログラム 職員の指導・助言 100% 96%

2 企画・立案

事業の必要性 (理由・背景等)	環境基本法で「環境の日」が定められて以来、国や地域で様々な取り組みがされているところである。当所でも、環境への取り組みに重点を置き、ISO認証取得及び維持管理とともに環境教育の推進に取り組んでいる。青少年に対しては、環境問題の現状を理解させるばかりでなく、環境に負荷をかけない生活スタイル及び実践方策等を提言していく必要がある。		
ニーズの把握状況	環境問題への関心や基本的知識は、一昔前と比べるとかなり普及していると思われるが、「地球にやさしい」生活の実践に主体的に取り組んでいる人たちは多いとは言えない。利用者等のアンケート結果により、必要性の認識を日常の実践に結びつかせたいというニーズを把握し、プログラムの立案に反映させた。		
ねらいとプログラムの 関係	環境や自然のしくみが楽しみながら分かる参加体験型のプログラムとし、身近な自然環境の理解と興味・関心を深められるようにした。		
主なプログラム (タイムテーブル)	第1日		
	時 間	プログラム	活動内容概略
	13:30～14:00	開会式	ねらいの共有化等
	14:00～17:00	講義及び実習1	環境に配慮した衣食住について1
	19:00～20:30	講義及び実習2	環境に配慮した衣食住について2
	20:30～22:30	交流会	情報交換等
	第2日		
	時 間	プログラム	活動内容概略
	6:30～7:00	早朝プログラム	朝の自然観察
	9:00～15:30	講義及び実習3	環境に配慮した衣と食の実習
15:30～16:00	閉会式	ふりかえり等	
事業の改善点 (継続事業のみ)	環境にやさしい生活の実践者を講師として招き、衣・食・住それぞれの分野において、体験型のプログラムを準備した。また、自然体験活動の指導者を講師と参加者を結びつけるコーディネーターとして配し、アイスブレイクやふりかえりのほか、プログラム途中のサポート等を担当した。		
企画・立案体制(関係機関・講師との連携等)	日常的に環境問題を意識し、その解決に取り組んでいる実践者を講師として依頼し、事前に事業のねらいの共有化を図った。プログラムデザインについても、講師・コーディネーター・担当職員間でコンセンサスを得た。		
募集人数の設定基準	参加者一人ひとりが十分かつ安全にプログラムを体験し、理解を深められる適正人数を、講師と協議して設定した。		

3 参加状況等

募集人数・募集対象	募集人数：30人 募集対象：社会人，学生，高校生
参加者数(申込者数)	参加者数：31人(申込35人)
参加者内訳	高校生：11人，学生：0人 社会人：20人 (20代6人，30代8人，40代2人，50代1人，60代3人)
参加地域	設置道県：29人， 設置道県以外：2人(内訳：埼玉県2人)

広報活動	開催要項・チラシの配布及び掲載（関東地区の社会教育施設・都道府県委員会等・青少年教育団体・各種学校・WEB上・新聞・広報誌等）
参加費	4,000円
運営担当者	企画指導専門職：4人

4 事業実施

ねらいの周知・方法 （参加者・講師・職員）	開催要項及びWEB上において、ねらいや当日の内容を提示し、電話や郵送及びメールを送付することにより周知した。講師とは、事前の会場周辺下見や用具等の打合せ、また講師宅訪問やFAXによるやりとりを通じて理解を深め、ねらいを共有した。さらに2次案内によっても周知した。
参加者の学習状況 （学習内容・方法）	自然素材を使った染め物ワークショップや厳選された自然食材を使っの野外調理など、参加型のプログラムを取り入れ、参加者が講師と一緒にたって、学び、気づき、感動するという展開にした。また、その学んだものなどを、その場限りでないようにするため、染め物の方法や食事のレシピを配布し、持ち帰ってもらった。
日程運営 （スケジュール）	講義（お話）と実習を織り交ぜた展開にしたので、タイムキープが難しい場面があったが、参加者の協力等でスムーズに運営することができた。
学習環境 （施設設備・教材資料等）	開講式及び講義は、外に出やすい研修室（音楽室）を使用した。野外での活動は、そこから直接あかぎ自然学校に移動して実施した。
健康・安全対策	安全管理マニュアルに基づいて活動中の安全対策を実施した。緊急体制については事務室待機職員と連携し、スタッフ全員で手順を確認した。
講師・関係機関等との連携 （ボラ等を含む）	事前に実習場所や用具の確認及び点検を行い、安全対策を講じた。また、事業のねらい、雨天対応も含めてのプログラム内容、進行等を確認した。

5 事業実施後の評価や普及

参加者の評価 （アンケートの自由記述等から）	参加者は改めて環境を意識し、実践に結びつける大切さを実感したようだ。「衣食住について深く考えるきっかけができました」「『環境の日』は毎日だと自分に言い聞かせて、でも無理なく楽しく暮らしていきたい」などと、研修内容の成果を自分の日常に生かしていくような感想が聞かれた。
講師・関係機関等の評価	参加者の意識が高く、全員意欲的に事業に参加していた。自分のスキルアップにもつながったとの評価を得た。
職員の評価 （企画段階から関わったボラ等を含む）	事前に事業のねらい・プログラム・参加者情報等を、講師やコーディネーターと共有し、参加者の立場を考慮した運営をすることができた。参加者のモチベーションの高さにも助けられた。
事業報告の状況	文教ニュース社や官庁通信社を通して事業内容を発信した。WEB上にも事業報告を公開した。また、所内にも報告の掲示をした。
普及実績 （計画・予定を含む）	環境問題に関心を持ちながら、指導的な立場で活動している参加者が多く、その上「衣食住」という身近で日常的なテーマで実施したため、各活動分野・各地域において、教育的な普及や効果が期待される。
事業後の反応 （参加者・普及先等）	数日後、数人の参加者からお礼と成果を日常に活かす旨のメールをいただいた。あるいは、事業で得たことを広めたいとか、他の環境関係の事業にも参加したいという希望も聞かれた。

6 その他の特記事項（成果等）

<p>環境問題への取り組みについては、一般的な関心も基本的な知識もある程度普及している。課題は現実的に日常生活で実践できるかどうかである。今回の講師は、環境への取り組みを、「衣食住」の生活全般において日常的に実践している方なので、その言葉や態度、実習での指示などに重みと説得力があり、参加者もうなずきながら聞き入ったり、楽しみながらも真摯に取り組んだりしている姿が印象的であった。</p> <p>当所としては、ISOへの取り組みなども含めて、環境教育の推進を図っているところであるが、今後は企画事業等で得た成果を、研修支援事業などで積極的に利用者に働きかけることも視野に入れ、プログラムの内容なども考えていくことが必要になるろう。</p> <p>今回の講師：スペースムウ 角張光子氏・角張みづゑ氏</p>
--